CITIZEN OF THE YEAR 2016

社会に感動を与える人々を
応援します

他者への優しさ、勇気、熱い想いにあふれた市民活動を
私たちはこれからも称え、応援してまいります。

シチズン時計株式会社
代表取締役社長
戸倉 敏夫

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、創立60周年を迎えた1990年、社名にCITIZEN（市民）を冠する私たちにふさわしい記念事業をとの想いから創設されました。以来、社会に感動を与える市民の方々に光をあて、その活動を顕彰させていただいております。

今、世の中には分断、差別、不寛容などの言葉がはびこり、人々の考えも自分中心になってきているような気がします。しかし、受賞者の方々の活動は、そうした風潮とは逆に、他者を思いやる優しい心、諦めずに前へ進む勇気、熱い想いにあふれています。人々や地域社会のため、自分にできることを実践されている姿に、未来に向けた一筋の光を見る思いがいたします。

私たちはこれからも、「感動」をキーワードに良き市民の活動を称えるとともに、自分たちも、社会のために何ができるかを問い続けてまいりたいと思います。

シチズン・オブ・ザ・イヤーとは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2016年度 選考委員会

● 委員長	山根 基世	元NHKアナウンス室長
● 委員	大坪 信剛	毎日新聞社 社会部長
	香山 リカ	精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
	角田 克	朝日新聞社 社会部長
	原口 隆則	読売新聞社 社会部長
	益子 直美	スポーツコメンテーター
	三笠 博志	産経新聞社 社会部長
	八木谷 勝美	日本経済新聞社 社会部長

敬称略・五十音順
※肩書は、2017年1月現在

Contents

3 NPO法人 就労ネットうじ
みっくすはあつ
野球ボールの再生を通し
障害者と地域の心をつなぐ

7 塗魂（とうこん）
ペインターズ
国内外でボランティアを行う
熱き魂の塗装集団

11 堀内 佳美さん
タイの人々や子どもたちに
読書の素晴らしさを伝える

15 対談
シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長 山根 基世さん & 2016年度受賞者 堀内 佳美さん

18 歴代受賞者一覧

各受賞者へ贈る書

書道家
武田双雲

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」、世界一のスパコン「京」など数々の題字を手掛ける。独自の世界観で、全国で個展や講演活動を行っている。メディア出演も多数。

みっくすはあつによせて

小中学生のとき僕も野球部でした。でも、ここまでボールを大切に扱ったことがなかったので、
糸の切れたボールを一つひとつ縫い合わせる地道な活動に感動しました。障害のある人の就労支援や地域とのつながりに役立ち、
選手たちにものを大切にする心を育むエコボールに尊敬を込めて、書をお贈りします。
武田 双雲

01 | CITIZEN OF THE YEAR 2016

野球ボールの再生を通し 障害者と地域の心をつなぐ

NPO法人 就労ネットうじ みっくすはあつ／京都府宇治市

NPO法人 就労ネットうじ みっくすはあつ

ひと針ひと針の糸がつなぐ 選手の夢、地域との絆

「ありがとうございます。キャッチボールしましょう！」
丁寧に糸を縫い合わせたボールを納品に行くと、声を掛けてくれる野球部員たちがいます。
障害者の就労支援施設みっくすはあつの利用者にとって、
ボールを通した高校球児との触れあいは、かけがえのない大切な時間です。

「もったいない」をきっかけにわずか20個からスタート

京都府宇治市で、障害者の就労支援を行っているNPO法人 就労ネットうじ みっくすはあつの管理者、小畑治さんは、2009年、ある会合の席で知人の大門和彦さんから話しかけられました。「みっくすはあつは縫製作業もやっているの？ だったら、糸が切れた硬式ボールも縫えるんじゃないかな」

プロ野球、元横浜ベイスターズの投手だった大門さんは、現役引退後、実業家の道を歩む一方、社会貢献活動にも積極的に携わり、小畑さんと交流がありました。そんな大門さんが、母校の東宇治高校の野球部を訪ねたとき、糸が切れて使われなくなった多くのボールが放置されているのを目にしました。「もったいない」と思うと同時に、高校時代に自分たちで修繕していたことを思い出し、みっくすはあつの仕事にならないかと考えたのです。

糸が切れた硬式ボールは、今はテープを巻いてトスバッティングなどに使われ、そのあと破棄されています。しかし、修繕すれば練習用のボールとして立派に使え、寿命が3～4倍に延びて経費の節約にもなります。

「話を聞いたとき、ボールの再生を通して施設の利用者と野球部の生徒さんにつながりができれば、きっと良い相乗効果が生まれるのではないかと思いました」。そこで小畑さんは、さっそく糸の切れたボールを20個預かり、大門さんの指導のもと利用者みんなで修繕にチャレンジしてみたのです。見た目はあまりよくありませんでしたが、ボールは何とか再生できました。表面が少しでこぼこのボールを見ながら、この活動はきっと広がるという予感が小畑さんにはあったといいます。修繕したボールを高校に持っていくと、出来は良くないながらも喜んでもらえ、それから預かる個数も増えていきました。再生したボールには、みんなで「エコボール」という名前をつけました。

得意な工程を分担し丁寧に修繕していきます

利用者を温かく見守る大門さん（写真上・左）と小畑さん（写真下・中央）

選手との触れあいが大きなやりがいに

ボールの修繕を始めてみると、それぞれの利用者ごとに得意な工程があることも分かってきました。切れた糸をほどく人、縫い合わせる人、縫った糸を最後に止める人、糸を丈夫にするためロウを塗る人など、小畑さんは作業を分担するようにしました。目が不自由な利用者も参加し、縫い上がったボールを一つひとつ丁寧に磨いてくれました。

ものを大切にする心、感謝の気持ちを育む

「それでも、納得できるレベルになるまで1年かかりました」と小畑さんは振り返ります。その間、エコボール活動は野球部の監督同士のつながりを中心に京都府内の高校、大学へと広がり、新聞でも紹介されて、共感した全国の就労支援施設で行われるようになりました。その背景には、単に経費が節約できるだけでなく、部員がものを大切に扱うようになる、障害のある人たちが一生懸命ボールを縫ってくれることに感謝する気持ちが芽生えるなど、教育的な効果も大きな理由になっています。

「エコボールは、できるだけ野球部の生徒さんに手渡しするようにして、交流の時間も大切にしています」。利用者にとって、ボールを再生して野球部員を支援できることは、社会への貢献を実感し、大きなやりがいや喜びにつながっているといいます。納品の際に、部員たちが自発的に利用者とキャッチボールをする高校もあり、大切な触れあいの時間になっています。

8年目を迎え、エコボール活動は利用者の自主的な活動になってきています

活動は全国に広がり、甲子園出場校も

利用者から縫い方を教えてもらう野球部員たち

高校球児とキャッチボールで交流

そんな高校の一つ、京都文教高校では、野球部員たちもみっくすはあつを訪ね、利用者から教わりながら一緒にボールの修繕を体験しています。木田邦浩監督は、「野球の技術以前に、まず人間としてきちんと育てたいという想いがありお願いしています。一球一球丁寧に縫っていただいているのを見て、生徒たちは改めて用具を大切にするようになっています」と話します。キャプテンの寺本蓮君も、「いつもきれいなボールに仕上げていただき、みんな感謝しています。プレーの上でプラスになっていると思います」

お互いのことを想い、共に生きる大切さを学ぶ

スタートから8年。20個から始まったみっくすはあつのエコボール活動は、累計で1万5000個を超えました。活動は現在、22の就労支援施設に広がり、全国の高校や大学、独立プロリーグ、リトルシニアチームなど約180もの団体から委託を受けるまでに発展しています。

活動が拡大しても、大門さんや小畑さんたちは、エコボール活動の基本姿勢を今もしっかり守っています。「まずこの活動が、施設利用者の就労支援であることを理解していただくことが一番大事だと思っています。なので、納期を問わないこと、出来上がりについても問わないことをお願いしています」と大門さん。そうすることで、単なる発注者と修繕する業者という関係にならず、若い世代が障害のある人と共に生きることの大切さを学ぶ機会になっています。

エコボールを使う高校の甲子園出場も増えて、利用者にとっても大きな喜びです。ものを大切にする心や感謝の気持ちを育むことが、チーム力にプラスになっているとさえ感じさせます。

現在、みっくすはあつでは、10代から60代までの約10人がエコボールに携わり、1個につき100円の修繕費はすべて作業をする人たちに還元されています。今年2月には、エコボール活動を行っている全国の就労支援施設が一堂に会する「第一回エコボール全国集会」も京都で開かれ、取り組みの報告などを通し横のつながりも深めました。

小畑さんはこの活動を続ける原動力について、「何よりエコボールが利用者の就労支援となって、しかも確実に広がっていくのを実感できることが大きい」と言います。そして「高校の野球部の監督さんから、部員に良い効果が生まれていると聞くのが私も利用者もうれしく、そんなつながりができていくのが一番のやりがいです」と、これからの発展に想いをはせます。

エコボールの納品は、利用者と野球部員の大切な触れあいの場になっています

塗魂ペインターズによせて

「塗る」というシンプルな行為を、ここまで素敵な世界観へ高めていった皆さんの行動力と志に感動しました。
書道には道の文字がつきますが、「塗道」という言葉が生まれそうな活動に乾杯。
武田 双雲

国内外でボランティアを行う熱き魂の塗装集団

塗魂ペインターズ／とうこんペインターズ　事務局:群馬県前橋市

全国から有志が集まる塗装ボランティアの現場はいつも笑顔が絶えない

塗魂（とうこん）ペインターズ

街を幸せ色に塗り替え、人びとの心に明かりを灯す

「俺たちだからこそできる貢献を、もっとやろう！」
2012年秋、東日本大震災の被災地、宮城県女川町を訪れた現会長の宮嶋祐介さんは、
色を失った町を見つめながらそう心に決めました。
自分たちだからこそできる「塗装ボランティア」でもっと社会を明るくしようと、
塗魂ペインターズはさらに力強く活動を加速していったのです。

一人ひとりの力は小さくとも力を結集すれば大きな社会貢献に

ね」と振り返ります。それまで知名度がなく、ボランティアを申し出ても断られていましたが、これを機に活動が軌道に乗りはじめました。

現会長の宮嶋祐介さんも草創期からのメンバーで、今も語り草となっている埼玉県上尾市の特別支援学校での塗装ボランティアから参加しました。「これをボランティアでやるの？ というくらい大規模な塗装でした。それを延べ100人以上のプロが、ものすごい結束力で一気に塗り上げていくんです。それは壮観でした。自分でも年に何回かボランティアをしていましたが、力を結集すればこんな大きなスケールの社会貢献ができるんだと感動しました」

青年部長の清水剛さんは、上尾での第2回のボランティアから参加しました。当時清水さんは、工賃の未払いなどで苦労しており、塗装業を続けるかどうか迷っていましたが、池田さんの勧めで塗装ボランティアに参加。「会ったばかりの自分を親身に励ましてくれる宮嶋さんたちに、魂を揺さぶられました」と共に頑張ることを決意したそうです。メンバー同士の連帯感の強さと熱い想いは、結成当初からのものでした。

仲間同士が技術や経営を学びあい業界自体の底上げにも貢献

実績を重ねるとともに、会員は全国に広がっていきました。現副会長の大倉達也さんは、大阪の会員が1社もないことに業を煮やして加盟したメンバーです。上尾のボランティアから参加し「自分たちの技術を活かしてボランティアできるのは、こんなに楽しいのか」と感じたそうです。それと同時に「各地から参加した先輩たちが、自分にない技術を教えてくれたり、貴重な経験を話してくれたことにも感動しました。それらを継承していくことも、塗魂ペインターズの大きな役割だと思いました」と話します。実際、塗装の技術はもちろん、経営についてのアドバイスや、自社の成功事例などを伝えあうことも多く、業界自体の底上げにも貢献している面があるそうです。

佐々木拓朗さんは、宮嶋さんから「一度来れば分かるから」と誘わ

熱い想いを語る、左から清水さん、結城さん、宮嶋さん、佐々木さん、大倉さん

結成当初から強かったメンバー同士の連帯感と熱い想い

2009年、ある大手塗料メーカーが、何か新しい試みができないかと、塗装業者に呼びかけました。参加した10数社が具体的な活動について模索する中、会議の席で後に初代事務局長になる池田大平さんから声が上がりました。「よし、ボランティアをやろう！」。一瞬の沈黙のあと皆の目が輝き始めました。〝熱き魂〟の塗装集団の名を冠した「塗魂ペインターズ」誕生の瞬間です。

「ペンキ屋として独立したが、何か世の中の役に立てることができないか…」以前から社会貢献に関心を持っていたメンバーも多く、安田啓一さんを初代会長に「塗装でできる社会貢献」という理念を掲げました。

記念すべき第1回の塗装ボランティアは、2010年3月に17社38人が参加して、神奈川県伊勢原市の幼稚園で行われました。その時のことを現副会長の結城伸太郎さんは「幼稚園の屋根をみんなで一気に塗り替えました。塗りながらものすごく楽しかったです

記念すべき第1回は幼稚園の屋根を塗装

財政赤字に苦しむ北海道夕張市でも塗装ボランティアを実施

れ参加しました。それでもしばらくは、「ボランティアを公言」している団体に懐疑的な想いがあったと言います。しかし、「困っている会員を助けたり、当時の安田会長や会員たちの驚くほどの純粋さを知るにつれ、兄弟のような連帯感が生まれました」と、今では熱き集団の事務局長を務めています。

東日本大震災の被災地での経験は大きな転機になりました。色が無くなった町に立ち、宮嶋さんは「津波の巨大な爪痕の前で自分たちの無力さを感じていました。ここから、俺たちだからこそできる活動で、もっと社会の役に立とう、塗装ボランティアをもっと意味のあるものにしよう、と拍車がかかったんです」と言います。被災地での活動はその後、熊本地震でも行っています。

東日本大震災の被災地、宮城県女川町の惨状を見るメンバー

震災被災地での活動を体験し社会に向けた動きが加速

ボランティア実施先からのお礼のメッセージは元気の源だ

色を失っていた遊具が塗装で鮮やかによみがえる

塗装ボランティアでは子どもたちに体験してもらうことも

アフターケアも怠らないのが塗魂ペインターズのモットー

自分たちが塗装を行うだけでなく、力を合わせて一つのことを成し遂げる喜びや、ものを大切にする心を育みたいと、子どもたちの塗装体験も行っています。「塗魂ぬりぬり教室」や「親子塗装教室」などで子どもたちが夢中になっている姿は、塗装という仕事に対する誇りや励みにつながるそうです。

世界に勇気と希望を与えられる塗装ボランティア団体へ

活動の場は国内にとどまりません。戦後70年の節目を迎えた2015年12月には、総勢60人余りで真珠湾のあるハワイに渡り、海外塗装ボランティアを敢行。現地の高校とお寺で活動を行ったあと、アリゾナ記念館を訪れて当時の安田会長が献花し、英語でスピーチをしました。塗装を通して平和に貢献したいという気持ちを込めたスピーチは、現地の人たちにも塗魂ペインターズのメンバーたちにも大きな感動を与えました。

2016年3月には、ベトナム・ホーチミン市の病院とレストランを塗装し、10月には海外支援部門として「塗魂インターナショナル」を設立しています。さらに、2017年の9月には、リトアニア共和国の「杉原千畝記念館」の改修プロジェクトに50人以上で参加し、外壁修繕を行う予定です。

北海道から沖縄まで、全国各地から参加している加盟社は現在約150社になり、海外も含め、これまで行ってきた塗装ボランティアは約80カ所を超えます。活動に共感した多くの企業が刷毛や塗料の提供などでバックアップしてくれていますが、交通費や宿泊費などは塗魂ペインターズのメンバーがすべて自前でまかなっています。

2017年中に、加盟200社を目指したいという会長の宮嶋さん。「塗装を通して、皆さんの心の中に幸せな明かりを灯し、世界の人々に勇気と希望を与えられる団体を目指します」と、今後について熱い想いを語ります。

堀内 佳美さんによせて

本の世界は、人生の可能性を広げてくれます。
タイの地で、言葉の壁も自らの障害までも乗り越え、本の読み聞かせによって
人々に新しい世界へ飛び立つチャンスを作り出している活動に心打たれました。感動を書に込めてお贈りします。
武田 双雲

03 | CITIZEN OF THE YEAR 2016

タイの人々や子どもたちに読書の素晴らしさを伝える

堀内 佳美さん／ほりうち よしみ　1983（昭和58）年生まれ。タイ・チェンマイ県在住

堀内 佳美さん

生涯の友となる本との出会いを一人でも多くの人に

「自分には生きている価値がないと思っていました。
でも、本を読むうちに気持ちが楽になって生きようと思えるようになりました」
家族との確執に悩み、自殺まで考えたというその女性は、堀内佳美さんたちの図書館の本で
さまざまな人の生きざまに触れたことで、とても救われたと話してくれました。
堀内さんは、この一人の女性の役に立っただけでも、7年間活動を続けてきた甲斐があったと話します。

アークの最初の訪問先となった児童養護施設での活動。子どもたちに紙芝居や折り紙の楽しさを伝えた

タイ留学で知った、日本とはまったく異なる読書環境

高知市に生まれ、生後間もなく先天性の白内障と緑内障の合併症が発症した堀内佳美さんは、高校1年生のとき完全に光を失いました。そんな堀内さんの心の支えとなってきたのが、いつも寄り添ってくれたたくさんの本でした。

幼い頃から祖父や両親に本の読み聞かせをしてもらっていた堀内さんは、読書を通してさまざまな世界を知りました。「よく読んでもらっていたのは『若草物語』や『家なき子』などの児童文学でした。小さいので内容はよく分からないのですが、読んでもらうことがうれしくて、そこから物語の世界に入っていきました」。小学校で点字を覚えてからは、一日中点字本を読書する「本の虫」になったそうです。

物語の世界に子どもたちを引き込む、堀内さんの読み聞かせ

幼い頃、読み聞かせに夢中だった堀内さんは、小中学生時代は「本の虫」に

「タイの人たちに、本の素晴らしさを伝えたい！」

東京の高校に進学した堀内さんは、同級生や先輩がアメリカに留学していることに触発され、「私も行きたい」と一念発起。反対する両親を説得するよう先生からアドバイスを受け、高知に帰り二人の前で正座をして留学への想いを訴えたそうです。こうして、高校3年生の時に一年間のアメリカ留学を果たした堀内さん。留学中にタイ人の友達と知りあったことが、後の活動へとつながりました。

大学は国際基督教大学に進学。この頃すでにタイ留学を考えていた堀内さんは、まず1年生の3月に少数民族の村で教会をつくるという短期間のワークキャンプに参加しました。実際にタイに行ったことで留学したい想いがさらに募り、国際協力のような形で貢献したい熱意が高まっていったそうです。

大学3年生のときにタイ留学を果たした堀内さんは、さまざまな障害者団体の活動に参加しました。家庭訪問に同行したり、アルバイトなども経験して、タイでのネットワークを広げていきました。それと同時に、バンコク以外の各地の村を訪れる中で、日本とは読書環境がまったく異なり、本が非常に高価で図書館もほとんどないことを知ったのです。「現地の友達と本の話をしても、読書をする人イコール真面目で頭がいい人というイメージなんです。本は勉強するためのものであり、子どもたちの多くは読書を楽しむということを知らずに育つのです。なんとかしたいという想いが生まれました」

大活躍する昨年寄贈された移動図書館カー「はるの号」

ボランティアがタイ語の訳を貼ってくれた絵本

絵本以外の本もそろえている

日本で人気の絵本もタイの子どもたちの夢を育む

リュックに本を詰め込み、子どもたちのもとへ

留学を終えて帰国した堀内さんは、大学を卒業して日本の企業に就職。しかし、タイの子どもたちと本をつなげる活動をしたいという想いは膨らむ一方で、2年で会社を退職すると、インドに創設された視覚障害者などが社会事業家となるための養成学校に入りました。「インドから帰国後、タイで移動図書館を計画していると地元の新聞が取り上げてくれ、賛同いただける方も見つかり、2カ月後にはタイのバンコクに渡りました」

公園に移動図書館が到着すると親子連れがすぐに集まる

言葉が持つ可能性を、自ら広げてほしい

自身の読書体験やアークの活動について紹介してくれた堀内さん

こうして2010年、「これまで読書が自分を支えてくれたように、タイの人たちに本の素晴らしさを伝えたい」と、NGO「アークどこでも本読み隊」が始動したのです。アーク（ARC）とは「Always Reading Caravan」の略です。

読み聞かせを手伝ってくれるボランティアも見つかり、活動は6月からスタート。記念すべき最初の訪問先は児童養護施設で、紙芝居や折り紙に喜ぶ子どもたちの声が印象的でした。

「それでも、申し出を断られることもありましたが、活動は少しずつ広がっていきました」と話す堀内さん。リュックに本を詰め込み、乗り合いバスで施設を回る日々が続きました。

やがて、チームとして活動する大切さを感じた堀内さんは、集まったボランティアとしっかり計画を立て、車に本を載せて農村を回り、学校や児童施設、公園、病院などで本の読み聞かせや貸し出しをするようになりました。「読み終わっても、まだ帰りたくないと言って泣く子もいて、そんなときはうれしいですね」

ランマイ図書館は大人から子どもまで本を楽しむ憩いの場に

成長する仲間と共に、タイの未来へ想いをはせる

移動図書館のニーズは地方のほうが格段に高いことや、地元の財団から誘われたこともあり、堀内さんは2012年、活動の拠点をタイ北部のチェンマイ県プラオ郡に移しました。ここで初めて有給のスタッフを雇ったことで、より計画性を持って移動図書館の活動ができるようになりました。

移動図書館で山村を訪れたとき、倒木に道をふさがれ村に泊まってゆっくり話す機会を得たことから新たな活動も生まれました。山岳地帯に住む少数民族の人たちは、ほとんどタイ語を話すことができないため、街に出ても仕事の機会が得られないことを知ったのです。「それなら、子どものうちからタイ語を教える施設をつくろう」と、幼児教育センター「太陽の家」を設立することにしたのです。先生はタイ語ができる現地の村人にお願いしました。「大事なのは村の人が主体となってやることなんです」。多くの人の支援を受けながら、現在は別の少数民族の村で2カ所目のセンター「笑顔の家」を運営しています。

活動を通しスタッフも成長

2013年には、移動図書館だけでなく、誰もが利用できるコミュニティ図書館として、6000冊の本とDVDを所蔵するランマイ図書館がオープンしました。もちろん、プラオ全域を回って本の貸し出しや読み聞かせを行う活動も継続しており、外出が難しい高齢者や障害者のところへは直接訪問して貸し出しを行っています。

「タイの人や子どもたちに、本の貸し出しや読み聞かせを喜んでもらえることはもちろんですが、スタッフの成長が実感できるのがとてもうれしいです」と話す堀内さん。スタッフから積極的に新しい提案が出るようになり、ゆくゆくは現地のスタッフにすべて任せたいと思っているそうです。そして、「本の素晴らしさを知った子どもたちが、やがてお父さんお母さんになったとき、今度は自分の子どもたちに読み聞かせをしてくれたら最高ですね」と夢が膨らみます。

少数民族の子どもたちの可能性を広げるため幼児教育センターを設立

外出が困難な人には直接訪ねて本の貸し出しなどを行う

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長
山根 基世さん

対談

2016年度受賞者
堀内 佳美さん

障害も言葉の壁も乗り越えて人々の懸け橋となる

Motoyo Yamane

NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンス室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいる

Yoshimi Horiuchi

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2016年度受賞者の堀内佳美さんを迎え、現在のご自身につながる幼い頃の両親との記憶や、留学体験などで育まれた国際貢献への想いなどをお聞きしました。

家族だからこそ厳しかった言葉

山根　堀内さんのお父さんお母さんの教育方針って、どんなだったのかしら。

堀内　自分のことは自分でできるようになりなさい、あなたは目が見えないから人の3倍は努力しないといけないと言われていました。

山根　おうちの方は、あなたがしっかり自立するようにと、厳しいことも言われたのですね。

堀内　小さい頃、目が見えないので手を振ったり目を押したりすることがあったのですが、食事の仕方も含めて、きつく注意されました。家族だからこそ言ってくれたんだと思っています。

山根　ご家族は、将来のことをしっかり考えて、深い愛情で育ててくれたんですね。高校生のあなたが留学したいと言ったときは随分心配されたんじゃないですか。

堀内　高校は高知を出て東京の筑波大学附属の特別支援学校に進学したのですが、

入学してみると大学を目指す生徒や留学をする生徒がいてものすごく刺激を受けるんです。どうしても留学したくなり、高知に戻り両親の前に正座して頼み込みました。

山根　アメリカでの一人暮らしは不自由ではありませんでしたか。

堀内　アメリカでは自分から要求しないと何も伝わりませんから、まず、自己主張することを覚えました。日本人と一切話すこともなく英語を勉強する生活を10カ月続け、英語を日常のコミュニケーションツールとして身につけました。

山根　その後、大学時代にタイに留学を経験して、卒業後は日本で就職したのを2年で辞めて、今度はインドの学校に入りました。

堀内　タイに留学したときに、タイの人や子どもたちが読書の楽しみをほとんど知らないことを知って、何とかしたいと思ったんです。それで、チベットで初めて盲学校を創設したサブリエ・テンバーケンというドイツ人の全盲の女性が、インドで視覚障害者などが社会事業家となるための養成学校をつくるとお聞きして申し込んだのです。

山根　アメリカやタイの留学を経験して、国際貢献したい想いが強くなっていったのですね。インドの学校で学んでみていかがでした。

堀内　国籍もさまざまで、一緒に勉強しながら人それぞれ道徳観も価値観も違っていることを実感したのが大きかったですね。言いたいこともはっきり言いあうので、本当に家族みたいで、とても濃い1年でした。

山根　ここで学んだことが、堀内さんの人間関係の築き方に大きな影響を与えたんですね。

理解しあえたことでスタッフも大きく成長

山根　タイで活動をされてきて、一番辛かったのはどんなことですか。

堀内　スタッフとコミュニケーションがうまくいかなくなった時期があって、それが一番辛かったですね。スタッフから見ると、私は全部分かっていると思うんですよ。でも、見えないので分からないことも多い。見えないことがどういうことなのか見える人には分からなくて、お互いに伝えあわないと分かりあえないところがあるんですけど、向こうからすれば分かっているくせにと思うらしくて。

山根　それは気をつけなければいけないことですね。堀内さんの場合、目が見える人以上に活動をしていらっしゃるから、相手も見えないことを忘れてしまうんでしょうね。

堀内　そんなとき、地域の方が手を差し伸べてくれて、スタッフと話しあいをする機会を持つことができたんです。そこで、少しずつ誤解が解けてきて話しあいも増えました。

山根　コミュニケーションが改善されて、仕事も思った通りの方向に進むようになってきたんですね。じゃあ、子どもたちに読み聞かせしてあげる時間も増えてきているんですか。

堀内　今は寄付をお願いしたり、アークの運営をしたり、いろんな所で講演をする機会も増えて、それらだけで精一杯な状況なんです。そのぶん、スタッフが育ってきて、子どもたちと関わる仕事は任せられるようになってきました。最終的には現地の人に任せたいと思っているんです。

山根　子どもとの時間より人材育成とか、アークの仕組みづくりに取り組んでいかなければならないわけですね。

堀内　子どもたちとの時間を持ちたいのですが、しょうがないですね。アークのシステムをもっときちんとして、福利厚生も確立して、運営資金も寄付に頼るだけでなく継続して入ってくるように変えていかなければならないと考えています。まだまだいろんな分野に、支援が届いていない人たちがたくさんいるので、そういう人たちの橋渡しをしたい想いがあります。

お手本になる人を追って挑戦を続けてきた人生

山根　やはり、世の中の役に立ちたいというのが原点なんですね。その想いはどこから来ているんでしょう。

堀内　障害があって助けられるだけの存在というのは、ちょっと重いんですよね。子どもってお手伝いしたいんだけど、「佳美ちゃんはしなくていいのよ」と言われると、子どもながらに傷つくんです。みんなと同じでいたいと思うし、いつも助けてもらうばかりではなく、人に喜んでもらえることができるのを確認したかったんだと思うんです。

山根　シチズン・オブ・ザ・イヤーの受賞スピーチの最初に、「こういう活動をしているのは自分のためです」とおっしゃったのを聞いて、なんて正直な人なんだろうと思ったんです。自分を見つめていらっしゃるんだなと。これまでの人生を振り返って、あれが私の核になったと思う体験や言葉、出会いってなんでしょう。

堀内　私に世の中を見せてくれた、本との出会いはものすごく大きいです。本って、困ったときに頼りになるし、私を見捨てない、そんな友達みたいな存在だと思っています。そして、人生のいろんな節目でお手本になる方に出会って、そうなりたいという憧れを感じながら、それを目指して真似をして頑張ってきた感じですね。そして何より、目が見えない子どもとして生まれてきたのが、私という人間を決定づけた一番の要因ですよね。目が見えていれば、ずっと高知にいたかもしれません。目が見えなかったからこそ、東京の高校に行き、留学や大学への進学を思い立ち、そしてタイでこのような活動をすることになったのだと思います。

山根　それをプラスに変えていった堀内さんの力といいますか、その時々のお手本になる人を真似ようとする素直さや学ぶ姿勢が、今ここに堀内さんを連れてきていると感じます。何かに挑戦するとき失敗を恐れたりはしませんか?

堀内　あまり恐れる理由がないんですよね。今33歳で、やっていることが全部だめになっても、あと3回はやり直せるかなと思います。一生懸命やって失敗したならしょうがないと思うことにしています。

山根　強いですね。今日は、人生を学ばせていただきました。ありがとうございました。

（敬称略）

つねに正直に自分を見つめて頑張る姿に感動しました

私にとって本はいつも支えてくれる友達のような存在なんです

勇気をいただきました

目が不自由だからこそ今自分はここにいるんだ、失敗したらまたやり直せばいいという言葉を聞いたとき、堀内さんから勇気をもらって、自分も一歩踏み出そうという気持ちになりました。より良い世の中に変えるため、また新しいことに踏み込もうとする堀内さんに期待しています。 ―――― 山根基世

CITIZEN OF THE YEAR
1990-2016
受賞者の皆さん

1990年の創設から市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。これまでの受賞者の皆さんとその活動をご紹介します。

2016年度

NPO法人 就労ネットうじ みっくすはあつ		野球ボールの再生を通し、地域との交流や障害者の就労支援に貢献
塗魂ペインターズ		国内外を問わず駆けつけ、無償で塗装ボランティアを行う
堀内 佳美さん		読書が身近にないタイで、読み聞かせや幼児教育に献身

2015年度

NPO法人 JHDAC		病気などで頭髪の悩みを抱える子どもたちにウィッグを無償で提供
山崎 充哲さん		多摩川の生態系を守るため外来魚を預かる「おさかなポスト」を運用
白石 祥和さん		不登校や引きこもりの若者たちに寄り添い、自立や就労支援に取り組む

2014年度

原田 燎太郎さん		過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年
本間 錦一さん		水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー
阪井 ひとみさん		社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける
シチズン特別賞 高山 良二さん		地元住民たちと共に、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官

2013年度

TOY工房どんぐり		障害児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年
チャイルズエンジェル		子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈
上中別府 チエさん		高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む

2012年度

吉村 隆樹さん		障害者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供
渡辺 玉枝さん		自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成
ルダシングワ 真美さん		紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身

2011年度

税所 篤快さん		バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む
竹内 龍幸さん		盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける
笹原 留似子さん		東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2010年度

吉田 守松さん		半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける
吉岡 諒人さん		夏休みの観察・実験を通じ、“アリジゴクは排泄しない”という通説を覆す
樋口 強さん		がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2009年度

吉島 美樹子さん		ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている
多以良 泉己さん		リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている
茂 幸雄さん		福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2008年度

伊藤 和也さん（故人）		戦禍のアフガニスタンを緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる
川崎個人タクシー協同組合		知的障害施設の子どもたちと行く“タクシードライブ遠足”を30年間継続
出水市立荘中学校		ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2007年度

西谷 勲さん		中学の夜間学級に50年間仕送りを続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る
車内清掃を続ける高校生 有志		JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い
谷垣 雄三さん		西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2006年度

川越 恒豊さん		刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける
桑山 利子さん		スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす
有城 覚さん		交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2005年度

堀田 健一さん		障害者一人ひとりのニーズに合わせた自転車を、手作りで26年間作り続ける
吉野 健治郎・勝 親子		親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける
日本スピンドル製造株式会社 社員一同		JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2004年度

新宮山彦ぐるーぷ		20年にわたり大峯奥駈道（熊野古道）の南半分約45キロの整備を続ける
兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部 有志		水没していく観光バスの上で励ましあいながら全員が無事生還
永井 利夫・サヨコ ご夫妻		子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度

高松 由美子さん		長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援
遠藤 マルシア アケミさん		お弁当の配達が縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校
曽我 健太さん		ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

2002年度

谷村 基さん		励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける
武井 弥生さん		東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続
アフガニスタン義肢装具支援の会		アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈

2001年度

伊藤 明彦さん		全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録
大島 誠人さん		自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見
菅谷 昭さん		チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

2000年度

近藤 原理・美佐子 ご夫妻		障害者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた
ジュンコアソシエーション		ベトナムの子どもたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続
福祉工房あいち		障害者一人ひとりの障害度に合わせて、補助器具を考案し、製作

1999年度

セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん		在日米軍の父と地元女性の間に生まれた子どものために、学校を開設
トーマス・カンサさん		修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台
録音グループ「声」の皆さん		視覚障害者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1998年度

岸本 康弘さん		ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む
金子 聡美さん 安田 志津さん		ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断
「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん		電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1997年度

葛木 みどりさん		南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現
高澤 圭介・ナミ子 ご夫妻		私財を投じてお年寄りや障害者が気軽に立ち寄れる家を完成
愛知県立東山工業高等学校 車いす部		高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度

小山 道夫さん		ベトナムの子どもたちのため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設
福岡 明夫さん		自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録
古川 ヨシさん		障害者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師

1995年度

川田 龍平さん		命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身
木村 三男さん		濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出
神戸商船大学「白鴎寮」自治会		阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動

1994年度

星野 勇・シズエ ご夫妻		足の不自由な方のために1,000足を超える靴を無償で修理・改良
山下 秀治さん		知的障害者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築
森本 春子さん		山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1993年度

宇佐美 松恵さん		1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る
佐藤 昭夫さん		パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年
8/6 竜ケ水駅災害救助活動グループ		土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

1992年度

清水 ルイーズさん		日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている
干川 文次さん		絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元
『雄冬新聞』歴代編集長		地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー

1991年度

チョン・キューキョンさん		長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ
馬場 国敏さん		湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動
十円会		月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

1990年度

加藤 幸男さん		バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助
鈴木 陽子さん		過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動
林 錬友さん		使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付

CITIZEN

NPO法人
就労ネットうじ
みっくすはあつ

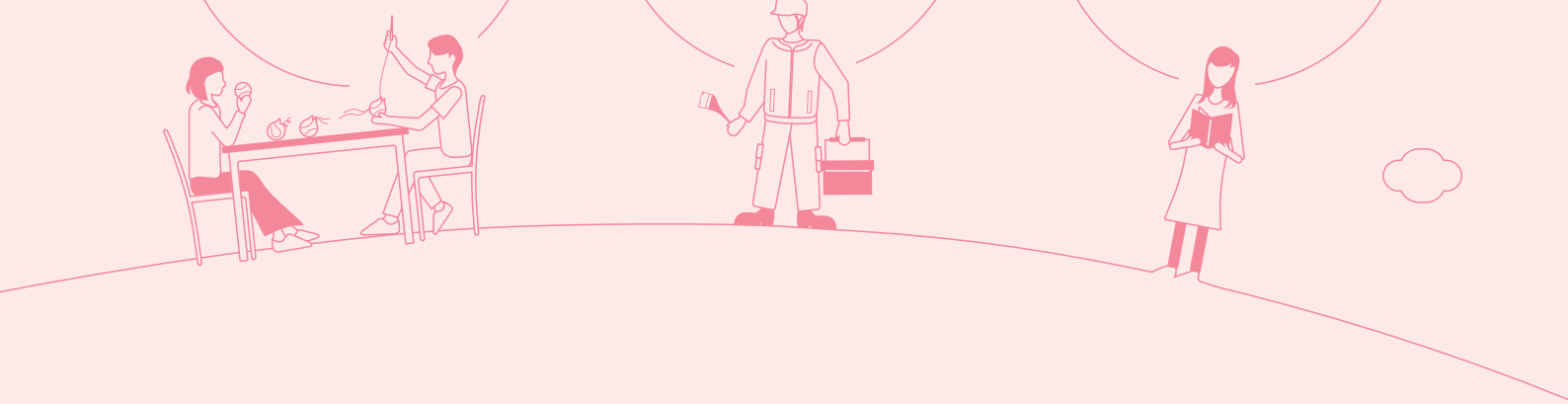
野球ボールの再生を通し
障害者と地域の心をつなぐ

塗魂（とうこん）ペインターズ

国内外でボランティアを行う
熱き魂の塗装集団

堀内佳美さん

タイの人々や子どもたちに
読書の素晴らしさを伝える



シチズン時計株式会社
〒188-8511　東京都西東京市田無町 6-1-12
TEL.042-466-1231　FAX.042-466-1280
http://www.citizen.co.jp/coy/index.html

CITIZENはシチズン時計株式会社の登録商標です。

2017年6月発行